プロティノスのエネアデス

「3 プロティノスのディアレクティケーについて　διαλεκτικὴ μέθοδος(ディアレクティケー・メトドス)」I-3-(20)

誤注における引用はプラトンの著書である

適宜、自分なりの注を加えてあるので、オレンジ色で示すことにする

1
どのような技術、方法、営みが、われわれの進むべき上方への世界へと、われわれを導くのであろうか、われわれの行かねばならないところ、それは善であり、第一原理である

一者のことである（訳注）

このことはすでに同意され、数々の照明を通して明らかにされたものとみなしてもらいたい、それだけがりでなく、このことを明らかにした証明それ自体がまたわれわれを、上方の世界へと導く手だてでもあったのである

だが、上方の世界へ導かれるにふさわしい人とは、どのような人でなければならないのだろうか、はたして、すべての事物を観ている人、あるいはプラトンの言うように、「その大部分を観ている人」「この世への最初の誕生に際して、知を愛し求める人、美しい音色を好む人、愛に生きる人のいずれかとなるべき種のなかへ植えつけられた人」でなければならないのだろうか

たしかに「上方の世界に導かれる人」とは、「その生まれにおいて知を愛し求める人、美しい音色を好む人、愛に生きる人のいずれかとなるべき種のなかへ植えつけられた人」でなければならないのである

では、その上方の世界へ導く手だてとは、どのようなものなのであろうか、はたして、右に述べたすべての人に、同一の手だてがあてはまるのであろうか、それとも彼らのひとりひとりに、それぞれ一つの手だてといったものがあるのであろうか

まことに、彼らのすべてに二段階の旅路があるのであって、それは彼らが下の世界から上の世界への行程をたどっているのか、それともすべてに上の世界へ到達したのかによって、区別されるのである

すなわち、はじめの旅は下の世界からのそれであるが

二番目の旅はすでに知性界に到達していて、そこにいわば足跡のようなものを残しているけれども、さらに前進して、その世界のはてに到達しなければならない人へのそれであって、そのはてこそは、人が知性界の頂上に到達した時の、その「旅路の終点となるところ」（「国家」VII532e3）なのである

だが、この旅路の方は持ってもらうことにして、それよりも先に、アナゴーゲー（上の世界への旅路）について、話すように努めなければならない

そこでまず、われわれはまずに述べた三種の人々を区別していかねばならないことになるが、その際、「美しい音色を好む人」から始めて、「彼はその生まれにおいて、どのような人であるかを話すことにしよう

まことに、美しい音色を好む人は、「美しいものには容易に刺激され、興奮するけれども、美そのものからは比較的に刺激されにくい人」であって、「美そのものの似姿のようなものをたまたま目にするとすぐに刺激され、騒音や絵一つのとれていない歌やリズムはいつもこれを避け、リズミカルなものや形のよいもののみを追い求める人」であるとしなければならない

他方、愛に生きる人は――美しい音色を好む人も、この愛に生きる人へと移行することができる。移行すれば、そこに留まるか、さらに進んで行くかの、いずれかであるが――なんらかの意味で美に対する記憶を持っている人である

だが、彼は美をただそれだけで独立したものとしては把握できず、視覚でとらえた美しさに打たれ、それに興奮するのである

したがって彼は、一つの肉体にすがりついて興奮することのないように教えられねばならない。そして言論でもって、すべての肉体の方へ導かねばならない

したがって彼は、美しいものには、それらの感性的な音声やリズムや形を後にして次のような仕方で導かれなければならない

すなわち、比例関係とか割合とかの元となっている諸原理から素材を分離して、それら諸原理のうえに座っている美へと導かれ、そのうえで、「君を興奮させていたのは、実はあれだったのだ。知的な調和とそのなかに宿っている美しさだったのだ。単なる個別的な美しさではなく、全体としての美しさだったのだ」ということが、教えられねばならないのである

そのようにすれば、「すべての肉体に同一の美が宿っていること」が示されるであろうし、また「その美は肉体とは別ものであること」や、「肉体以外のものに起源を持っていると言わねばならないことも。そしてさらに、「その美はむしろ肉体以外のものにあらわれることも、たとえば美しい営みや美しい法を示すことによって示されるであろうし

――というのも、彼は今や非物体的なものに宿る愛すべきものに、惚れ惚れしんでいることになるからであるが――さらにまた、「その美が技術や知識や徳のなかにあること」も示されるであろう

そして、彼のなかに知を愛し求める哲学的な言論が植えこまれ、そのようにすることによって、<彼が知らずして持っているもの>への確信へと導かれなければならないのである。だが、それらの言論が何であるかについては、後に述べられるであろう

そして次に、それらの美が一つの美へと還元され、「その美がどのようにして生じるのか」が教えられねばならない

しかし、彼は、諸々の徳から知性へ、真実性へと昇っていかなければならない。そして、そこを足場にして、上への旅路をたどらねばならないのである

3
これに対して、生まれながらにして知を愛し求める人――その人はすでに上への道をたどる用意ができている人であり、いわば「翼のそろっている」（「パイドロス」246c1）人でもあるのであって、すでに述べられた人びとのような分類はこれを必要とせず、すでに上方の世界に向かって動き始めている人びとは、ただ行き詰まっているので道を示してくれる人を必要としているにすぎないのである

だから、彼にその道を示し、導いてやらねばならぬ、彼自身も、もともとそれを望んでおり、はるか以前に解放されているのである

それゆえ、彼が非物体的なものへの理解と確信に慣れるよう、彼に学問を与え――事実、彼は「学を愛する者」であるから、それを受け入れるのは容易であろう――生まれながらにして徳に恵まれた彼を導き、その徳が完全なものとなるようにこころがけてやらねばならぬ

そして学問を習得した後で、ディアレクティケーの言論を与え、完全に「ディアレクティケーに習熟した者」となりなければならぬ

4
だが、すでに述べられた人びとにも投げる必要のあるディアレクティケーとは、何であろうか

それは、それぞれのものについて、「そのそれぞれのものが何であり、いかなる点で他と異なっているのか、そして共通点は何であるのか」をことばでもてあらわすことのできるヘクタス（たくみ）である

つまりそれは、「それぞれのものがいかなる種類に属し、その種類のどこに位置を占めているの（ツピステス253b8）か、それは<まさにそれであるところのもの>であるのか、そして タ・オンタ（存在）はどれほどあり、また存在と異なるものとしての タ・メー・オンタ（非存在）はどれほどあるのか」を言うことのできるくみなのである

それはまた善なるものと善ならざるものや、善なるものの部類に属するものとその反対のものの部類に属するものについて、また「永遠なるものとは何か、永遠ならざるものとは何か」など、これらすべての問題について、むろん、思いなしによってではなく、知識によって問答しながら、吟味するのである（「国家」VII535b8）

そしてそれは、感性的なもののまわりをさまようことをやめて知性界に居を定め、そこで虚偽を退けて、プラトンの言う「真理の野」（「パイドロス」248b6）で魂を養いながら、自らのなすべきことをなすのである

すなわち、プラトンの分割法（「ツピステス」253d）、あるいは何であるかをきわめ、あるいは第一類を見出して、これから成っているものを知性でもって編み合わせ、全知性界をくまなくめぐると、また逆にこれを解きほどくして、最初のものにもどるのである

ペシュカズムを連想させる

そして、その時には平静を持して――なぜなら、それは知性界にある限り、平静を保っているのであるから――もはや余計な仕事にわずらわされることなく、一なるものとなるべくなるものを眺め、「前提や推理勘考にかかわる論理的な仕事」と言われているものを、書くことの知識と同じように、別の技術にまかせるのである

そして、それらの仕事の成るものは、これを技術以前の予備知識として必要欠くべからざるものとみなすが（「パイドロス」296b7）、そのばあい、他の諸知識と同様、これを自分で判別し、その成るものはこれを有用とするが、他のものはこれを余分なものとみなし、これを必要とする研究の領域にまかせるのである

そして、それらの仕事の成るものは、これを技術以前の予備知識として必要欠くべからざるものとみなすが（「パイドロス」296b7）、そのばあい、他の諸知識と同様、これを自分で判別し、その成るものはこれを有用とするが、他のものはこれを余分なものとみなし、これを必要とする研究の領域にまかせるのである

5
しかしながら、この知識は、自らの諸原理をどこから得るであろうか、ヌース（知性）が明確な諸原理を、これを受け取ることのできる魂に与えるのである

そして次に、この知識がそれら諸原理につづく知識がそれら諸原理をむすび合わせたり編み合わせたり分割したりしながら、完全なる知性に到達するのである

というのも、この知識はプラトンの言うように、「ヌース（知性）とプロネーシス（思慮）とのもっとも純粋な部分（ピレボス」58d6）」だからである

したがって、この知識は、われわれのうちにあるもっとも貴重なくみなのであるから、真実性をもっとも貴重なものにかかわるのは必然であって、思慮としては真実在に、知性としては真実在を超えたかなたにあるものにかかわりがあるのである

では、どうであろうか、哲学は、もっとも貴重なものではないのであろうか、それとも哲学とディアレクティケーは、同じものなのであろうか

いや、ディアレクティケーは、哲学の貴重な部分なのである、なぜなら、事実、人はそれを「哲学する者の道具である」と考えてはならないからである

つまりそれは、単なる定理や規律ではなくて、実際の事物を取り扱い、真実性をいわば素材としてものである

むろん、それが真実性に迫るには、方途をもってするわけであるが、それは定理と一緒に実際の事物を扱うものとしてなのである

そしてそれが、他の者によってなされた虚偽や論弁を附帯的に論るのも、人はその虚偽を提出するばあいに、それがいかなる点において真実の規準に反しているかを論って、「自己自身の内にある真実とは緯のないもの」と判定するからである

それゆえ、それは命題について、「なぜならば、それは文字の集積にすぎないのであるから――

――なぜなら、それは文字のいかなる部分をも呼んでいるものを知り、

一般に魂の動きについても、「何を肯定し何を否定するのか、肯定していることを否定するのか、それとも別のことを否定するのか、それぞれが異なっているのか同じであるのか」を知るのであって、

そのばあい、それは提出されている事柄を感覚知覚をうであるように、直接的な知によって把握するのであるが、

それらについての臆断と議論は、むしろこれをそのことに適足している他の学問に譲るのである

6
したがって、ディアレクティケーは、哲学の貴重な部分なのである、というのは、哲学は他の部分も持っているからである

つまり哲学は、ディアレクティケーの援助を得て自然についても考察するのであって、それは他の諸技術が数学を助力者として用いるのに似ているのである

しかし、むろん、このばあいの哲学とその助力者としてディアレクティケーとの関係は、もっと緊密なのである

これに対して、ロギカイ・ペクセイス（理知的な徳性）の方は、ディアレクティケーに由来する諸原理を、すでに固有なものとして所有しているのである

つまり、理知的な徳性は、たとえ素材界で活動していても、その諸原理のほとんどがディアレクティケーから得ているわけである

そして、別の諸徳は、それぞれに固有の経験や行為のなかで思惟するのであるが、プロネーシス（思慮）だけは「エピロギスモス（より高度の思惟）」とでもいうべきものであって、むしろ普遍的なものに関連しており、「相互の関連はどうか、現在は行為を差し控えるべきなのか、今後はどうなのか、またこ別のことをした方がよいのか」などを思惟するのである

同様に、哲学はタ・エーテー（人倫）についても、ディアレクティケーの援助を得て考察するのであるが、このばあいには、諸々のヘクセイス（徳性）とそれらを生むむ修練とをけけ加えて考察するのである

倫理はエーテーから派生したエチケットを基にしているのであるから人倫という言葉の使用は誤解を招くのではないか

エートス（Ἔθος）は、「いつもの場所」（ἠθεια ἴστπεωυ）を意味し、転じて習慣・特性などを意味する（Wikipedia）

この二つの比較からは、タ・エーテーは諸徳性と訳する方がよいのではないか

人倫は拡大解釈であり、ここで述べられているプレテー（徳）にも通していない振る舞いであるので、「風住まい」とでも言うべきだろうか

だが、これに対して、ディアレクティケーやソピアー（知恵）は、すべてをさらに普遍的かつ素材を伴わぬ形で思慮の用に供するのである

だが、下位の諸徳は、ディアレクティケーや知恵なしでも、あり入るのであろうか。あり入るはずなければも、不完全で不足のあるものとしてである

だが、もしそうだとすると、人は下位の諸徳なしでも知者たりえるし、ディアレクティケーにも堪能な者たりえることになるのであろうか

いや、そのような者には、決してなりえないであろう。下位の諸徳は知恵よりも先にあるから、知恵と一緒に育ってくるかの、いずれかなのである。おそらく、人は自然的諸徳を持っているのであって（アリストテレス「ニコマコス倫理学」VI13,1144b3）、知恵が生ずるにつれて、それら自然的諸徳から完全な諸徳が育っていくのであろう

したがって、知恵は自然的諸徳より後からさて、それから、その知恵がそれらのタ・エーテー（諸徳性）を完全なものにしていくのである

あるいは、むしろ自然的諸徳があって、知恵と自然的諸徳とがともに育ち、ともに完全なものとなっていくのでは…？

いや、一方の徳が先行し、他方の徳を完全な徳としたのである。なぜなら、一般に自然的徳は「眼」においても不完全だからであって、自然的徳と完成された徳とを同わず、きわめて重要なのは、それらの源となる諸原理なのである